氏　　名	高橋（タカハシ）　ちはる
学位の種類	博　士　（音　楽）
学位記番号	博　音　第 165 号
学位授与年月日	平成22年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉シェーンベルク作曲《四つの歌曲　作品２》他 〈論文〉ピアノ伴奏付き歌曲における相対音程に基づく歌唱表現の可能性 －シェーンベルクの《四つの歌曲　作品２》を中心として－

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教　授	（音楽学部）	伊　原　直　子
（演奏審査主査）	〃	〃	（　〃　）	伊　原　直　子
（演奏審査副査）	〃	〃	（　〃　）	檜　山　哲　彦
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	永　井　和　子
（　〃　）	〃	名誉教授		朝　倉　蒼　生
（論文審査主査）	〃	教　授	（音楽学部）	伊　原　直　子
（論文審査副査）	〃	〃	（　〃　）	檜　山　哲　彦
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	永　井　和　子
（　〃　）	〃	名誉教授		朝　倉　蒼　生

（論文内容の要旨）

和音の変化や音楽的な構造が複雑なピアノ伴奏付き歌曲では、歌の旋律を詩のリズムや文のまとまりを生かして表情豊かに歌うことがしばしば難しいと感じる。そこで、ピアノ伴奏付き歌曲において歌の旋律を表情豊かに歌うための試みを、シェーンベルクによる《四つの歌曲　作品２》を例として考察した。

《四つの歌曲　作品２》は、ヴァーグナーからの影響と思われる半音階的和声の使用、機能和声の解放という和声的特徴と、ブラームスの影響と思われる形式の保持、対位法的構造とが調和した作品であると位置づけられてきた。このような複数の作曲家の作曲技法を折衷することで新たな様式を生み出そうとする動きはツェムリンスキーが試みていたことであり、その試みを継承しているという点でツェムリンスキーからも影響を受けていると言えるだろう。また、《四つの歌曲　作品２》の中の３曲はデーメルの詩に音楽的探究心を触発された結果生まれた作品であり、《二つの歌曲　作品１》がロマン派的な作風であったのに対し、《四つの歌曲　作品２》では印象派風の和音技法を用いた作風へと変化した、と見ることができる。

しかし、他の作曲家からの影響などについて触れるだけでは《四つの歌曲　作品２》の特徴を浮き彫りにすることは難しい。そこで、歌の旋律が表現する、詩が持つ文としてのまとまりと、ピアノパートに見られる音楽的フレーズの変化との関係に着目して楽曲分析を行った。すると、文としてのまとまりを保持したいと思われる部分において、音楽的フレーズの区切りが見られたため、詩の持つリズムや文のまとまりと、音楽的フレーズの変化との間に「ずれ」が見られた。

この「ずれ」によって、和音の変化は歌の旋律の進行から独立し、印象主義的な和音ごとの色彩感とその移ろいが強調されていると見ることができる。このような和音ごとの色彩感を強調する構造は、《四つの歌曲　作品２》の独自性と言えるだろう。

《四つの歌曲　作品２》の特徴を生かしつつ、旋律を表情豊かに歌うため、声楽を用いた演奏形態の

一つである無伴奏の声楽アンサンブルにおいて行われている、声部間の相対的な音程関係に基づく旋律歌唱に着目し、ピアノ伴奏付き歌曲である《四つの歌曲　作品２》への応用を試みた。

まず、声楽アンサンブルにおいて相対音程を形成する際の基準とする、自然倍音列に基づく音程と、ピアノの調律の基準となる平均律に基づく音程との比較を行い、共鳴する和音を形成するための音程関係について述べた。

次に、無伴奏声楽アンサンブル作品であるパレストリーナの作品と湯浅譲二の作品とを例に挙げ、声部間での相対的な音程関係に基づいて、共鳴する協和音程と不協和音程を形成する過程について考察した。その結果、相対的な音程関係を形成し、和音としての共鳴を図ることで、協和音と不協和音の性格の違いも際立つといえる。

さらに、共鳴する相対音程を形成することで、旋律の隣り合う二つの音の間に生じる音程関係が僅かながら変化する。この音程の変化から音楽の推進力が生まれ、旋律の音の連結を強化し、ひいてはそこで歌われる歌詞の単語間の連結や文としてのまとまりをも促している。

声楽アンサンブルにおいて形成される、声部間での相対的な音程関係を、ピアノ伴奏付き歌曲においては歌の旋律とピアノパートの和音の構成音との間に形成することができると考え､《四つの歌曲　作品２》の特徴である、詩の文のまとまりと音楽的フレーズの「ずれ」によって詩の抑揚や文のまとまりを表現することが難しいと思われる部分への応用を試みた。

すると、和音それぞれが共鳴し、性格の違いを際立たせることで､《四つの歌曲》の特徴である、和音の色彩感の変化が強調される、という効果が見られた。また、歌の旋律の、隣り合う二つの音の間に生じる音程関係を強調するように歌うことで、単語間の意味上の連結と文としてのまとまりを保持することができ、歌の旋律において詩のリズムや抑揚を表現することができ、さらに歌の旋律とピアノパートとが共鳴する響きの中で一体化し、曲全体の音楽的な調和も促される。

ピアノ伴奏付き歌曲における歌の旋律とピアノパートとの関係を音程という面に特に着目してみていくと、旋律で用いられるすべての音は、ピアノパートの和音と合わせて音楽が進行する際には和音の構成音として存在し、和音同士の連結を促す働きが見えてくる。

このことから、歌の旋律とピアノパートによる和音との相対的な音程に基づいて旋律を歌うということは、旋律のすべての音に対し、和音の構成音として与えられた役割に合わせて音高の所在を定め、次の和音への進行に向けて方向付けをする、ということになる。

これらのことから、題目で示した「ピアノ伴奏付き歌曲における相対音程に基づく歌唱表現」をすることによる音楽的効果とは、歌の旋律の音高の所在をピアノパートとの相対音程に求めることで、歌の旋律に方向性が生まれ、それがテキストの抑揚、文としてのまとまりを強化する、という事だと言えるだろう。

（博士論文審査結果の要旨）

申請者　高橋ちはるの博士学位論文審査会が行なわれた。題目は「ピアノ伴奏付き歌曲における相対音程に基づく歌唱表現の可能性」。

和音の変化､音楽構成が複雑なピアノ伴奏つき歌曲の演奏に際して､いかに効果的に演奏すべきかを、シェーンベルクの“四つの歌曲　作品２”を中心として考察を試みたものである。

詩のリズム、文のまとまりとピアノ、パートに見られる音楽的フレーズの変化の間に、“ずれ”が見られ、この“ずれ”により色彩感が生まれるとし、さらに中核となる声楽の自然倍音に基づく音楽と、ピアノの平均律に基づく音程の比較を行ない、共鳴する和音を形成する為の音楽関係について、本人の声楽アンサンブルの経験から無伴奏アンサンブルを例にとって述べ、“四つの歌曲”に応用を試みている。しかし演奏に際し、本研究が如何にとり入れられるかはかなり無理がある。ともあれ、演奏家としての

自らの問題点を基として将来に対する解決の糸口となり、今後これらを、どの様に具現化するか、本論文は、そのひとつの過程となり得たことは評価し、全員一致で判定は“合格”とした。

（演奏審査結果の要旨）

メゾ、ソプラノ　高橋ちはるの博士学位審査、公開演奏会は「シェーンベルク〈四つの歌曲　作品２〉とその時代 ── リヒャルト・デーメルの詩による歌曲を中心として ──」のタイトルのもと、リヒャルト・シュトラウス、アルマ・マーラー、アレクサンダー・ツェムリンスキー、アルバン・ベルク、アルノルト・シェーンベルクの歌曲作品21曲が奏楽堂に於いて演奏された。

意欲的プログラムであり、全曲にわたって安定した響きをもつ中音域・低音域は高く評価される。一方高音域での技術面が改善するならば表現の可能性は格段に広がったに相違ない。論文「ピアノ伴奏付き歌曲における相対音程に基づく歌唱表現の可能性」から、その研究を演奏に活かす試みがなされたのであろうが、実際には演奏の自由さを奪ってしまった感があるのは残念である。さらにテクストの読み込み、歌とピアノの音楽の掘り下げが十全ではなく、感性の大切さと共に、歌うことの本来的意義が求められた。

しかし、いくつかの課題を残したものの、今回の演奏を通し、演奏家として大きく開花する確信は得られ、本審査の判定は全員一致で“合格”と認めた。